

多嚢胞卵巣症候群に対する漢方の有効性について

山内博子¹, 小倉里香¹, 辻尚也¹, 小西晴久¹, 藤原奨¹, 森本真晴¹, 勝佳奈子¹,
中岡義晴¹, 森本義晴²

1 医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

2 医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】多嚢胞卵巣症候群(PCOS)は生殖年齢女性の約10%にみられ、排卵障害を認める。排卵誘発使用後もしばしば卵胞発育に難渋し、排卵誘発に対する過剰反応で多胎妊娠や卵巣過剰刺激症候群のリスクが高い。排卵誘発剤以外に漢方薬を併用することで、卵胞発育や妊娠に寄与するのではないかとわれてきた。漢方薬による排卵障害の改善効果についての症例報告はあるが、複数の症例で検討した報告は少ない。本検討では一般不妊治療希望のPCOSの患者を対象に、漢方薬の内服の有無による妊娠成績の比較やホルモン値の変化を検討した。

【方法】日本産科婦人科学会診断基準2007に基づいてPCOSと診断した78例について検討を行った。このうち漢方薬の併用を希望した44例(漢方薬服用群)を対象とした。気血水の間診票から柴苓湯・温経湯・加味逍遙散・加味帰脾湯・半夏厚朴湯・当帰芍薬散のいずれかを選択し、排卵誘発剤と併用した。漢方薬の併用を希望しなかった34例(対照群)と妊娠成績について比較した。漢方薬服用群では、服用継続2ヶ月後以降にホルモン値を再検し、ホルモン動態の変化があるかを検討した。

【成績】妊娠成立は、漢方薬服用群では56%(25/44)、対照群では38%(13/34)で漢方薬服用群の方が高かった($p < 0.05$)。服用前後のホルモン値については、血中FSH基礎値は、服用前後で 7.05 ± 1.28 mIU/ml から 6.68 ± 1.30 mIU/ml とほとんど変化は認めなかったが、血中LH基礎値は、服用前 13.9 ± 7.1 mIU/ml から服用後 9.1 ± 2.1 mIU/ml に減少した。LH/FSH比は、服用前は 1.92 ± 0.87 であったが、服用後では 1.38 ± 0.59 となった。

【結論】本検討では漢方薬服用群の方が有意に妊娠率は高かった。PCOSの症例で一般不妊治療の際に漢方を併用することは、妊娠率向上のための有益な選択肢の一つになると考えられる。また、漢方服用後のLH値の減少傾向を認めたことから、漢方服用によるホルモン動態への影響も期待できる可能性がある。